



れば、これは貴重と言えるでしょう。そのためなら他の時期に授業負担が集中してもいい、と思う教員はいると思います。もう一つは、交換留学そのものはよいことなので、本当にその円滑化・効果の増大につながりうるならば新制度を見守ってもよい、という（あまり確信のもてない）期待です。グローバル人材育成のかけ声の下、随分と海外の協定校が増えましたが、これからは関係の維持と教育効果の面でかなり工夫を強いられることになるでしょう。その面で四学期制が生きてくるかどうか……。単に他の国立大学に右へならえで導入したというのでしかないとしたら、期待は薄いかもしれません。

## 仕事ごっこに忙殺される日本の学校

日本の教育と研究に関連したことで、2016年に報道された2つのデータが印象に残っています。一つは、東大がアジアの大学ランキングで1位から7位に順位を下げたこと。順位を発表したイギリスの教育雑誌は、背景として、日本の大学における資金の少なさと国際化の遅れをしておりました。国内的には、「せめて教員の雑用がもっと少なければ」という声が多く出ていたように思います。もう一つ印象的だったのが、日本の中学校教員の労働時間がOECD諸国の中でとびぬけて長いという報告です。しかも、授業に費やす時間は他国と同じくらいで、授業以外に関係した労働時間が異様に長いというのです。確かに、日本の学校の先生たちは、会議、書類作り、さらには部活動の顧問で忙しくて、じっくりと研究したり生徒と向き合ったりする時間がない、という指摘・悲鳴をよく耳にします。突出しているという調査結果もむべなるかな、です。大学の場合、仕事の内容は異なりますが、研究・教育という中心的な事柄以外のことで忙しいという現状は、中高の先生たちと共通していると言えるでしょう。この雑用による多忙はいったい、日本のカルチャーとでも言うべきものなのでしょうか？

カルト宗教の教団が信者のマインドコントロールに用いる一つの方法は、「忙しくさせて、考える暇を与えないこと」です。ビデオを見せる、説教を聞かせる、奉仕と称した労働をさせる、感想文、反省文を書いて提出させる、等々の束縛によって、わずかの眠る時間以外には自由に行動したり考えたりする時間を与えないようにすることです。そうすると、信者はだんだんと考えることが面倒になって、繰り返し聞かされる「教え」を受け入れるようになってしまうのだそうです。自由時間を与えるのをおそれるかのごとく、「改革」の立案・遂行を次から次へと強いてくる今の日本の教育行政は、どこかこれと似ていないでしょうか。私たちはもしかしてカルトの術中にはまっている？ いずれにしても、諸外国との比較で考えさせられるのは、一連の「改革」に伴う雑務の少なからぬ部分は、本当に必要なことではたぶんないということです。それらは、仕事というよりは「仕事ごっこ」にすぎません。「改革」で文科省にいい顔したいという考えは、もちろん大学存続のためには無意味と言えないでしょう。けれども、「ごっこ」に一生懸命になったために仕事の本当の質が低下してしまったとき、その責任をとらされるのは私たち埼玉大学です。学長以下、大学執行部の方々には、このダブルバインド的状况にあって、「したたか」な思考で舵取りされることを切に求めたいと思います。

### ★新年度役員が選出されました★

2017年度組合役員の選挙が終わり、新しい執行委員、代議員、会計監査委員が選出されました。組合員みなさま、ご協力ありがとうございました。今年度執行部の任期も残り少なくなってきましたが、まだできるかぎり発信を続けたいと思います。みなさまよいお年を。

埼玉大学教職員組合

〒338-0825 さいたま市桜区下大久保 255

E-mail : saikyoso@gr.saitama-u.ac.jp URL : <http://kumiai.client.jp>

TEL / FAX : 048-853-5609 内線 : 3160

組合事務室は第2生協1F 開室時間 : 月火水木 12時~17時

